

みどりヶ丘薬局におけるポリファーマシー実態調査と今後の課題

石井不二子¹、夕向 茂¹、五井 嘉一¹、藤田わかさ²、
島野 清³

¹みどりヶ丘薬局、²多摩薬局、³地域保健企画本部

【背景・目的】

薬剤師によるポリファーマシー（以下 PP）への介入ポイントは患者からの要望があった場合と副作用が疑われる場合とされている。その観点から自局の PP 実態調査を行い、実際の関わり方や今後の課題を考察した。

【調査方法】

定期的内服薬を6剤以上使用している患者を対象に記入式アンケートを行い、薬歴から処方薬の調査を行った。1ヶ月間に63名の方の協力が得られた。

【結果と考察】

年齢は52～94歳で平均76.7歳。男性37名・女性26名。薬剤数は6～18剤で平均8.5剤であった。

①『薬を減らしたいか?』の質問には、減らしたい気持ちのある方68%（43名）（A群）、減らしたくない方16%（10名）（B群）、わからない方16%（10名）（C群）であり、介入の余地があることがわかった。しかし、減らしたい気持ちのある方の中には「できれば減らしたいが飲んでいると安心だから減らしたくない」等入り混じった感情も見られ、細かに患者の訴えを傾聴していくことが必要である。各群の平均薬剤数はA群8.5剤、B群8.4剤、C群8.5剤であり、剤数による違いは見られなかった。

②薬を服用していて気になる症状があると答えた患者51名中、それらの症状を引き起こす可能性のある薬剤を服用している患者は23名（45%）であった。副作用疑いの観点からも介入すべき患者が多くいることがわかった。また普段聞き出せていない症状を回答した患者もいたため、PPの患者には今回のアンケート項目も聞き取りをしていく必要を感じた。

【まとめと今後の活動】

PPに関わるには患者情報の収集が最も重要だが、充分聞き取れていない現状があらかになった。記入式のアンケートは患者の素直な声を拾い上げるのに有効だったので、今後は質問票に内容を盛り込み定期的に情報収集していきたい。また連携している医療機関との情報共有のため連絡ノートを作成し活用を始めた。